

T温泉場より

水野 仙子

M氏の奥様へ。

此間はお端書^{はがき}を有難う存じました。
ほんとによく照りつゞきますことね。
こゝの青葉にせばめられた白い道にも
大分埃^{だいぶほり}がたつて見えます。暗いほど濃
い緑の山は、まだ照りつゞく日に疲れ
た模様も見えませんが、川の水は大分^{だいぶ}
減つて川床が現はれてゐるものですか
ら、下駄のまゝであちこち飛び傳^{つた}ふの
によりなりました。

それでは今年はどこらへもお出掛に
なりませんですか？ 全く今年あた
り^{ちよつと}は一寸名の聞えた避暑地へは吾々^{われ}が
寄りつけないやうですのね、こんな都^{みやこ}
に遠い名も無い温泉場にすら、早くも
成金風^{なりきんかぜ}が吹き寄せてゐるのですもの。
私なんか今年は病氣のおかげで避暑な
んでいふ柄^{ぜいたく}にない贅澤^{ぜいたく}が出来る譯^{わけ}なん
ですけれど、いえ避暑といふよりも空
氣のいゝところへ轉地^{てんち}するのが目的だ
つたんですから。さうしてこゝを選ん
だ第一の理由は、一番故郷^{こくに}の家から近
く、又若しの場合に醫者^{いしや}の便利が悪
くないこと、それから途中の難所^{とちう}でな
いこと等で、ともかく來て見れば思ひ
の外土地^{ほか}は私の氣に入つたのでした。

東北本線の郡山驛^{がんだつせん}から一寸岩越線に

入つた三つ目の停車場に降りると、そ
こから平坦な道を八丁餘^{あま}り歩けばいゝ
ので、故郷^{くに}からは五つばかりの停車場
を越せば宜^{よろ}しいのです。停車場から宿
までの間に人力車が一臺^{だい}もないのは、
漸^{やうや}く病床を這^はひ出したやうな私をひ
どく悄氣^{しよげ}させましたが、仕様^{しやう}がないか
ら歩きましたとも！ だつて六つにな
る甥^{をひ}が先に立つて元氣に歩いて行くの
ですもの、それに久しぶりで見る青い
山と、行手^{ゆくて}／＼に流れてゐる清い水と
が大へん私の心を引つ立てました。そ
してたうとうそれに就^ついて心配したや
うな障^{さは}りも無くてしまひました。

私の宿は河岸^{かし}の湯槽^{ゆぶね}に近く立つてゐ
て、前^{うしろ}と後とに山を背負^{せお}ふたり抱^だいた
り、まだ若やいだ鶯^{うぐひす}の聲を聞くかと
思ふと、閑古鳥や郭公^{ほととぎす}が啼^なき、またカ
ナ／＼が終日暗い緑の中でうたつてま
す。この川では河鹿^{かしか}もよく啼いてゐる
さうですが、私はまだそれを聞きつけ
ません。螢^{ほたる}は素的^{すてき}に大きなのが飛んで
ゐて、よくすうと川風に誘はれて部屋
の中なぞに入つて來ましたが、土用^{どよう}に
入つてからはだん／＼ゐなくなりまし
た。

一体このTといふ温泉場^{をんせんば}はつい近年
に開けたので、木標^{もくへう}の示す所によれば
大正三年七月となつてゐます。停車場
のすぐ傍^{そば}にあるA温泉は、これは隨分

古くからあつて、腫物や火傷や蛇に咬まれたのなぞに卓効があるとされてゐますが、何しろ入つてゐるとお腹が冷たくなる位にぬるいんださうです。それはしかし湧出する湯そのものがぬるいではなくて、湯元から傳うて來る其距離が長い爲めに途中で冷えてしまふのだらうといふ解釋から、こゝらを一つ掘つて見ようではないかといふのが初まりなんださうです、つまり人間の頭腦から掘り出した温泉のやうなもんですね、もつともそれに偶然の時機が伴つて完成したのですけれど。それはかうなんです、村人が何かの用事でこの川を遡ぼつて來ると、丁度この邊に來て急に水が温んでゐるのですつてそれがどうも川底の温度ではなく岸の岩から出て來る水によつてらしいといふので、其岩を少し穿つてみたら、果して温かい水が流れて出たといふのですよ。

入浴が目的でない私は、お湯の性質などに氣もとめないで、たゞ石の湯槽に滿ち溢れる温泉の透明なものと肌障りと柔かいのとに満足して、最初にぶんと來る硫黄の匂ひに、如何にも天然の鑛泉らしさを知るだけですが、聞けば弱鹽類泉で、ラヂウムも幾らか含んでゐるんださうです。

旅館はこゝの外に一二軒と、外に二

三軒の百姓屋が農事片手間に宿屋を營んでゐます、その前を通つて見ると、家の前の小流れで小娘が米を研いだり食器を洗つたりしてゐますの、さうしてこれらの家の庭にはよく青葉がぐれに貸浴衣を干してあるのが見えます。

しかし一寸したお料理が喰べられるのは此宿たゞ一軒で、その代りには丸鬚に結つた藝者を連れたお客だの、又時々は宴會などがあつて、かなり煩い氣のする時があります。ほんとに何處にでも酒の匂ひと金の力とは如何にも素早く侵入して行くものですね、私の見るところどうも此土地は割合に早くさうした方面に發展して行きさうに思はれます、恐らくそれはもう二三年を俟たないでせう。この歳史のない温泉がその發展の爲めにかなり心を勞してゐるにも係はらず、妙に浴客本位でないやうに見えるところは、(他の旅館に於いての感想は知らないけれど。さうしてかく見える理由はまた、此温泉が村の共有でないらしい所にあるのかも知れませんが)まだ基礎の定らぬ過渡期にあるとはいふものゝ、何となく賣出しの半玉といったやうな感じがいたします。無論やがての嬌態と手練手管を胚胎してゐるところに於てです。

こゝから廿六七丁ばかりのところ

に丁の金山かなやまがあつて、其持主をH氏といひ、この温泉場もすべて同氏の出資になり、従つて此一帯の地に於けるその勢力は大きいもので、この宿なども命令か一下で直ぐどうにでもなるやうな模様が見えます。それで思ひ出したけれど、まあ聞いて下さい、此間のことなんですよ、この丁に何とか子爵様ししやぐさがおいでになるのだとかいつて（たうとう名前を聞き洩らしました、女中に訊きいても番頭にきいても、たゞ子爵様といふこときり知らないのですもの）宿は午後からひつくりかへるやうな騒さわぎなんです、一寸の間まだけれど一般の入浴を禁ずるやら、お客を片づけるやら、私の居た部屋などもお次つぎの者の爲めに徴發ちやうはつされてね、私達のやうに位階や爵位の權威を知らぬ者には、全く馬鹿々々しくて呆れるやうな騒ぎなんです。其夕方私はその馬鹿々々しい不愉快な騒ぎの中を遁のがれて、ひとりでふり／＼しながらあてもなく野の道を歩いて行きました。すると折から丁度其時間だつたものと見え、高い蹄ひづめの音がして先驅せんくを承うけたまはつたとも見える若者の一騎が私の脇かすを掠めて疾驅しつくして去りました。（H氏は非常に馬が好きで、事務員や技手達もよく馬に乗つて山から出て來ます）ふと見ると山の出鼻ではなを廻つた道から、そのなんとか子

爵の乗つた馬車がかすかに砂塵さちんをあげて疾驅して來ます。馬車は三臺だい續いて（皆H氏のです）其脇を警護さむらひの士のやうに二三騎がもの／＼しく馬首を進めて來るではありませんか、併し一寸外國風な感じがして綺麗でしたよ、子爵様はこれか見てやらうと思ふ間もなく、一寸道脇の草に馬首を避けた間にさつと馬車は駆けぬけてしまつて、二番目の車臺しゃたいに乗つてゐた一人の、のつぱりした長い顔だけが私の目に残りました。私はそれを家扶かふだらうと思つて思はず微笑ほゝゑみました。何となく三太夫といふものゝ型にちやんと箆はまつてゐるやうに見えましたから。

けれど再び自分の顔を眞直ぐに道の方へ向けた時に、それは何といふ美しい入日の光景だつたでせう、道の兩側に連なつて起伏してゐる山の端はしに落ちた夕日の餘映よえいが、ばら色に空を染めて一日の終りを華かに彩いろどつてゐました。

「さあ、今のうちに仕殘した今日の仕事の極きまりをおつけ！ 私はもう一寸の間暮あひだれて行くのを待つて居よう！」とでもいふやうに、ゆつたりと自然は落着いて其溫顔をんがんを無差別に吾々へ向けてゐます。自然は決して私のやうに彼の富者や貴族やそれに※おもねる者をも擲揄やゆしなかつたのです、さうした平等の愛をもつて、大きな首肯うなづきをもつて、ガラ

／＼と軋きしつて行く馬車や馬の背後うしろに夕日の光彩を添へ、まだ野にゐる農夫達の手許こころぐはに心配りの光りを残してゐました。私はなんとなく胸がすつきりとして來るのを覺おぼえました。私の胸を不愉快ひきしに引緊めてゐた狭い心の紐ひもが解かれたのでせう、私は口笛を吹きながら道脇の流れに小石をほふつたり、思ふさま青い空氣を吸込んだりして、子供のやうな氣持ちで暮てゆく日に遊びました。

私はやつぱり當分たうぶんこゝで暮さうと思ひました。酒にも煙草たばこにも用のないつましい女客をんなきやくとして、此宿このやどに於ける私の存在はちつぽけなものですけれど、人間が人間にする待遇はどうでもやうござんす、私は直接にこゝの自然のお客様となつて、新鮮な空氣や、山の眺めや、絶え間なく清く新しい流れやの御馳走うを享けて少し肥ふとりたいと思つてゐます。どうしても今月いつぱい位は居をりたいと思ひますから、どうぞ時々おたよりを下さいまし、郵便の配達は朝夕の二回で、郵便やさんはよく青い木の枝を日除ひよけに翳かざしてやつて來ます。こゝから出すのはAに序ついででのあり次第ですから、時には書いて置いても其日に出せない事もありますけれど、大抵たいていは番頭さんがお客を送つて行く時とか又は郵便やさんに頼んでやりますの。

これを書いてるうちに模様が變かはつて來て、細こまかな雨が降り出して來ました。顔を上げて見ると前の山の半腹はんぶくから白い霧がかゝつて、丁度すべても景色が薄絹すかを透すかして見るやうに見えます。あれ、頻りに郭公ほととぎすが啼いてゐます。日の影がなくなつたらまるで秋口のやうにしんみりと涼しくなつて來ました。若しこゝばかりでなかつたら、どちらでも此雨では一息つけるでせうね。それではどうぞお大事に。(八月三日)

入力者注…

底本は総ルビですが、ふり仮名は一部のみ残しました。
「え」の変体仮名は「え」に置き換えました。

「※」は「言十曳」
おもね

底本…讀賣新聞

大正六(1917)年八月十九日朝刊

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年十一月二十日

最終改訂…令和五年六月二十二日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)